JASE
# 現代性教育研究ジャーナル
MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY
2018年
No. 84
2018年3月15日（毎月15日）発行
日本性教育協会
THE JAPANESE ASSOCIATION FOR SEX EDUCATION
〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 中山博邦
© JASE. 2018 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

セクシュアルマイノリティであることと教職員であることを切り離さないこと…… 1
多様な性のゆくえ⑪…… 6
Dr.上村茂仁の性の悩みクリニック㉔最終回……7
性教育の現場を訪ねて⑫…… 8
今月のブックガイド…… 10
JASEインフォメーション …… 11

# セクシュアルマイノリティであることと教職員であることを切り離さないこと
## stn21の過去・現在・未来

セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク副代表・高校教員　土肥いつき

### はじめに

学校の中にはセクシュアルマイノリティ[注1]の子どもたちが多数いることは、かねてから指摘されてきました。例えば、木村（2003）は、キンゼイによる調査[注2]やJASE（日本性教育協会）の1981年調査[注3]など国内外のさまざまな調査結果を用いて、同性愛者の存在割合は数％であるとし、「これはつまりたとえば40人のクラスの中には何人かの同性愛の生徒が必ず存在するということです」と指摘しています[注4]。しかしながら、2003年の時点で、社会全体はもちろん、学校教育現場にもこのような認識があるとは言えませんでした。

このような状況に変化が見られたのは、2010年です。この年、文部科学省が通知「児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について」を出し、性同一性障害のある児童生徒が学校に存在することを示すとともに、相談体制を充実させることを求めました。さらに、2015年には通知「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」を出し、対応が必要であるとしました。

一方、2015年に電通ダイバーシティ・ラボが「LGBT調査2015」をおこない、「ストレート男性・ストレート女性以外の人は全人口の7.6％」という結果を出して以降、さまざまな書籍や啓発パンフレットに「LGBTは13人にひとり」、「40人の教室には2～3人」と書かれるようになりました。この調査に対しては、さまざまな観点からデータの信憑性に欠けるという批判が出されています[注5]。しかしながら、この調査が、かねてより指摘されてきた「教室の中のセクシュアルマイノリティの子どもたち」の存在を顕在化させる役割を、結果として担ったということは言えるでしょう。

このように近年、教室の中のセクシュアルマイノリティの子どもたちの存在が、性別違和のある子どもたちへの偏りがあったり、性同一性障害という病理モデルをとっているということはあるにしろ、顕在化する

とともに、とりくみの重要性が認識されるようになってきました。

しかしながら、学校の中には子どもたちだけではなく、教職員もいます。したがって、教室の中と同様、職員室の中にもセクシュアルマイノリティがいるはずですが、そのことは忘れられがちです。たしかに、学校教育の対象は子どもたちです。したがって、子どもたちが第一義に考えられるのは当然のことと言えるでしょう。しかし、職員室の中のセクシュアルマイノリティが「いないこと」にされているような学校で、教室の中のセクシュアルマイノリティの子どもが「いられる」ことは可能なのでしょうか。さらに近年、セクシュアルマイノリティが働きやすい職場環境をつくることが求められるようになってきました。したがって、教職員にとっての職場である学校がセクシュアルマイノリティ教職員にとって働きやすい環境であることを求めることは当然のことと言えます。

実は、今から17年前の2001年に、このようなことを提起して発足したグループがあります。それが、セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク（以下、stn21）です。本稿では、stn21の歴史と現在、そしてstn21が明らかにしてきた学校におけるもうひとつの課題についてレポートすることにします。

## stn21の歴史

### (1) stn21設立の経緯

まず、stn21を立ち上げたゲイの教員A[注6]さんが、stn21のニュースレターに書かれた設立に至る経緯を引用します。

設立に至る経過をふりかえります。私は、X県の県立高校に勤めています。勤務校の中でカミングアウトしていく過程で発信した情報に対して、何人かの孤立した「当事者」教職員の方から連絡をいただきました。その中で、ネットワークの必要性を感じ、早くから構想をあたためてきました。

一方で、あるゲイの教員がインターネット上で立ち上げたグループに、急速にメンバーが集まりはじめ、活発な交流が生まれました。ゲイであることと教員であることを切り離すことなく、仲間が集い、語り合える場を得たみんなの表情は、生き生きと輝いて見えました。このグループの活気、楽しさ、あたたかさには、私自身もほんとうに勇気づけられました。グループをつくり、運営しておられるBさんのご苦労と熱意に感謝するとともに、このあたたかい場を「ホーム」として、そこと緊密につながりながら、社会的な動きをつくりたいと思うようになりました。

ここで着目したいのは「ゲイであることと教員であることを切り離すことなく」という一文です。言い換えるなら、そのふたつを切り離さなくてはならない現実が当時も今もあるということです。当時、Aさんはわたしに対して「ゲイである自分を切り離すことなく、それを前提として教育について語りあうことが必要なんだ」と語ってくれました。それを実現する社会や学校をつくるために、stn21ははじまりました。

### (2) stn21のはじまり

2001年1月27日に東京でstn21の第1回ミーティングが開催されました。当日の参加者は17人でした。中には「そんな集まりに行くなら解雇も覚悟で」というプレッシャーを受けながらも参加を決意した人もいました。

当日採択された「設立趣意書」を掲載します。

セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク
設立趣意書

人間は本来、誰もが多様なセクシュアリティ（性と生）を生きる当事者であるはずだ。しかし、人間は「女」または「男」のどちらかに生まれ、「女の子」は「女の子」らしく、「男の子」は「男の子」らしく育てられ、異性を愛し、結婚して子育てをするという、きわめて画一的な生き方を強いる社会の圧力のもと、多様性は隠蔽されている。このような現状の中、レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセクシュアルなど、さまざまな性を生きるセクシュアルマイノリティは、自らの性のあり方を否定し、隠さざるを得ない。こうした「当事者」は、児童生徒や教職員の中にも、一般に考えられるより、はるかに多数存在する。

今後、「多様なセクシュアリティ」は、教育課題としての重要性を増していくであろう。「当事者」の教

職員にとって、自らの生き方を基盤に据えた教育活動を主体的に展開する機会である。

しかしそれは、自らのセクシュアリティといかに向き合い、折り合いをつけるかという重い課題を背負うことでもある。ことは容易ではない。この10年ほどで、先進的な性教育や人権教育の実践が「多様なセクシュアリティ」を視野に入れるようになった。しかし、生身の「当事者」がその中に存在しなかったり、存在しても、日常の外から訪れる客人に過ぎなかったりする場合がほとんどであろう。情報の浸透によって、今後次第に、「当事者」の子どもたちが教室の中で顕在化していくだろう。その子たちを支える学校づくりを進めなければならない。一方、「当事者」教職員のカミングアウトが子どもたちに大きな感銘をあたえ、ひとつのモデルを提供し、「自分とは関係ない現実感の乏しい問題だ」という意識を大いに揺さぶるにしても、それを系統だった性教育や人権教育のプログラムにどう結びつけるかという課題が残るだろう。

ここに必要となるのは、以下の２点である。

①孤立した「当事者」の教職員がつながり、情報を交換し、各自の現状や問題点、教育実践などを共有すること。

②「多様なセクシュアリティ」をテーマに加えた性教育や人権教育を実践している教職員との連携、交流。

なお、活動に際して、「望まないカミングアウトに追い込まれるのでは」という危惧に対しては、個人情報の保護に細心の注意を払うことで万全を期すものとする。（中略）

生きることの根幹にかかわる性のあり方、その多様性をキーワードに教育を変革すべく、ここに「セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク」を設立する。

2001.1.27

あるゲイの参加者は、stn21への思いを、次のようにニュースレターに書きました。

stn21が始まった。まだ具体的に何がしたいのか何が出来るのか、何をしなくてはいけないのか、など全くの未知数だが、それでも今この時期にここにネットワークができたことを喜んでいる。僕が教員になった10年前にはこういったネットワークが出来るなんて考えることもできなかった。僕たちの存在を可視化すること、そしていろいろなセクシャリティーの人が世の中にはいて、僕たちは当たり前の存在として教育について考えていけるようになりたい。

まさに21世紀の幕開け、「テロとの戦い」がはじまった9.11の前、まだ「21世紀は人権の世紀」と言われていた頃です。stn21の「21」には、そんな21世紀への希望が込められていました。

### (3) 活発化するstn21

stn21は、「趣旨に賛同する自立した個人が、各自の意思によって形成する緩やかなネットワーク」です。「緩やかなネットワーク」の意味は、「どこかの組織に属するものではない」ということと同時に「なんらかの社会運動を担うものではない」ということも意味しています。したがって、stn21の主な活動は、メーリングリストやニュースレターを使った情報交換と、年１回～２回の学習会でした。学習会では、セクシュアリティについての学習だけでなく、当時少しずつおこなわれはじめていた教育実践のレポートもありました。このような活動の到達点のひとつが、セクシュアルマイノリティ教職員自身によるセクシュアリティについての教科書的な本をつくるということでした。そしてできたのが『セクシュアルマイノリティ』(明石書店)でした。

しかしながら、当時のセクシュアルマイノリティに対する社会のまなざしは、今よりもひどい状況でした。ニュースレターの第１号には、「テレビ局へのはたらきかけ」という記事が掲載されています。

stn21を設立した直後から、メンバーの間で、「気になるテレビ番組を見た」という報告が相次ぎました。stn21の活動として、当初からテレビ局へのはたらきかけを想定していたわけではありません。しかし、テレビが子どもたちにあたえる影響は大きく、小学校に入学する以前の子どもがすでに「ホモ」や「オカマ」という侮蔑的な表現とともに、セクシュアルマイノリティに対する差別的な意識を刷り込まれる現実を考える時、当事者教職員のグループとして意見表明を行うことは必要かつ妥当であると判断しました。

何より、実際に番組を見たメンバーの「怒り」や「心の痛み」そして、「何かができないだろうか」とい

う思いの強さがありました。これを、少しでも対外的にインパクトのある行動に結びつけるために、stn21というグループが役立つならばと考え、メーリングリストを通じてメンバーの合意を得た上で、質問状をテレビ局に送付し、それぞれに回答を得ることができました。

このときに質問状を提出したのは「天才テレビくんワイド」(NHK)、「ここだけの話」(テレビ朝日)、「めちゃ２イケてる！」(フジテレビ）の３つの番組でした。2005年にはトミーに対して、玩具「黒ひゲイ危機一髪」の発売中止を求めました。

これらの抗議行動の背景には「子どもたちにセクシュアルマイノリティに対する差別的な意識を刷り込ませたくない」という思いと同時に、「教室の中にいるセクシュアルマイノリティの子どもたちをうつむかせたくない」というstn21のメンバーたちの思いがありました。まさに「セクシュアルマイノリティであることと教職員であることを切り離さない」がゆえの行動でした。

### (4) 停滞期のstn21

そんなstn21も、少しずつ活動が停滞しはじめました。理由は多々ありますが、最大の原因は、中心的なメンバーの多忙化です。

公立学校の宿命として転勤は避けられません。ある学校では比較的動きやすかったり、自分のセクシュアリティをオープンにできていたからと言って、別の学校に行って同じようにできるとは限りません。また、年齢を重ねるに従って、職場の中で責任のある仕事をまかせられることもあります。また、子どもたちの「気質」も学校や時代によって異なります。仕事だけでなく、親の介護に時間をとられることもあります。

こうしたさまざまな理由で、中心メンバーが動きがとれなくなり、それにしたがってメーリングリストでのやりとりも減り、やがて2010年の夏に東京で行われた学習会を最後に、完全な開店休業の状態になってしまいました。

## 忘れられない出会い

一方、先に述べたように、2010年の文部科学省の通知を受け、学校現場は少しずつセクシュアルマイノリティ、中でも性同一性障害に関心を持ちはじめました。それとともに、学校での研修会も持たれるようになりました。このような中、わたしのところにも研修会の講師の依頼が来るようになりました。そして、研修先の学校で、孤立しているセクシュアルマイノリティ教職員と出会う機会を得るようになりました。

ある学校での出来事です。研修会が終わり、教職員のみなさんが職員室にもどり、担当の方が少し席を外してわたしがひとりになった瞬間を狙って、わたしのところに来られた方がおられました。そして小さな声で「わたし、レズビアンなんです」とひとことカミングアウトしてくださいました。でも、すぐに担当の方が帰ってこられたので、話題をその日の講演の感想に切り替えられました。とりあえず、わたしからは「今日はありがとうございました。またメールをください」としか伝えられませんでした。その日の帰り道、すぐにメールがありました。わたしはお礼の返事の中に「実はstn21というのがあります。もしも集まりがあったら連絡してもいいですか？」と書きました。すると、「はい！是非是非お願いします（^^)」という返事が返ってきました。

Ｃさんというその方は、それから、数か月に一度メールをくださるようになりました。例えばこんなメールがありました。

私は４年生を受け持っているのですが、この学年では二次性徴の話が出てきます。教科書には、「思春期には異性のことが好きになる」と書かれていますが、どうしてもそうは教えられない。でも、それはテスト問題にも出てくるんです。「異性が好きになる」というのを解答として選ぶようになっています。

Ｃさんは、授業ではなんとか言えても、テストに出るとなるとどうすればいいのかわからなくなってしまったとのことでした。ただ、Ｃさんの場合は、わたしの講演を聞いている同僚の顔を見ながら「この人になら」という人を見つけて、その人にカミングアウトされました。そして、その同僚の教員と一緒に、どうすればいいかを考えることができたということでした。

あるいは、レズビアンカップルで子育てをしているＤさんという方から、「子どもの家庭訪問をどうすれ

ばいいか悩んでいる」というメールが来たことがありました。家庭訪問で担任に来られると、表札や家の中の様子から、女性ふたりで子育てしていることがわかります。その担任はDさんにとっては同業者です。つまり、同業者にDさんがレズビアンであることがわかってしまうことになります。もしかしたら、そのことがDさんの勤務校に伝わるのではないか、そしてDさん自身が仕事を続けられない、あるいは子どもが学校を続けられないことにつながるのではないかという不安を持っておられたのです。

ゲイでHIVポジティブの教員Eさんという方との出会いも忘れられません。講演のあとの打ちあげの席で、同僚の人たちは結婚していないEさんに「なぜ結婚しないの？」としつこくたずねました。Eさんは「さっきの講演聞いたでしょう」と言いながら、自分がゲイであることをカミングアウトされました。しかし、帰り道「でも、HIVのことは言えませんでした」と言われました。

そんなセクシュアルマイノリティ教職員の方に会うたびに、「stn21というグループがあります」と言いました。すると、誰からも「そんなグループがあるんですか！　ぜひ学習会をする時は連絡をください」という返事が返ってきました。「stn21の活動を、ほんとうに再開しなくちゃならない」という思いがどんどん強くなってきました。

## stn21の復活

2015年のある日、古くからの友だちであるトランス男性の高校教員Fさんから、「自分がやっている若手の当事者教職員のグループでセミナーをしたいと思っている」という相談がありました。即座に「それ、stn21としてやらない？」と返しました。活動が休止状態ではあっても、ネットワークは今でも生きています。そして知名力もそれなりにあります。「それを使ってほしい」と言いました。Fさんたちは相談の結果「やろう」という決断をしてくれました。そして、2016年11月に京都で久しぶりの学習会を開催しました。そこには、懐かしい顔だけではなく、CさんやDさんEさんをはじめ、ここ数年出会ってきたセクシュアルマイノリティ教職員のみなさんの姿がありました。

当日は2部構成で、第1部の分科会では、それぞれがやっている実践の交流をおこないました。そして第2部は「セクシュアルマイノリティ教員の新旧対談」でした。「新」として20代のセクシュアルマイノリティ教員が3人、「旧」としてstn21発足当初のメンバー3人が登壇しました。15年という時間を越えて「新」と「旧」がつながった気がしました。

翌年5月には、在日韓国人でゲイでHIVポジティブというトリプルマイノリティの方に来ていただいて学習会をおこないました。また、11月には東京のゲイの小学校教員Gさんを大阪にお招きして焼肉交流会をおこないました。また、そのGさんが中心になって、今年の2月に東京でも学習会をおこなうことができました。

stn21というバトンを受けとってくれる人が少しずつ増えてきています。

## おわりに――stn21の存在が提起してきたこと

2016年11月の学習会の「対談」で、「新」の教員から「旧」の教員に出された最初の質問は「どうやってカミングアウトをしましたか？」でした。「カミングアウト」という壁の前で立ちすくむ状況は、今もかつても変わりません。しかしながら、対談の最後に「でも、ようやく『セクシュアルマイノリティの問題は人権なんだ』というところまでは来た」という発言が「旧」のメンバーから出されました。

セクシュアルマイノリティであることと教職員であることを切り離すことのない学校・社会をつくるために、まだstn21の役割は終わっていないように思います。ぜひともたくさんのセクシュアルマイノリティ教職員のみなさんとつながっていきたいと思います。

【注】

注1　本稿では非典型的なセクシュアリティを持つ人を「セクシュアルマイノリティ」であらわすことにします。

注2　アルフレッド・キンゼイ他、1950、『人間に於ける男性の性行為』コスモポリタン社。

注3　（財）日本性教育協会編、1983、『青少年の性行動――わが国の高校生・大学生に関する調査・分析第2回』小学館

注4　セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク編、2003、『セクシュアルマイノリティ』明石書店

注5　三橋順子、2018、「『電通ダイバーシティ・ラボ』のLGBT調査」、続々・たそがれ日記（2018年3月1日取得、http://junko-mitsuhashi.blog.so-net.ne.jp/2015-04-25）

注6　本稿ではプライバシー保護のため、カミングアウトしている人も含めてイニシャルにしています。

多様な性のゆくえ

One side／No side［11］

宮田 一雄
みやた　かずお
ジャーナリスト。公益財団法人エイズ予防財団理事、特定非営利活動法人エイズ＆ソサエティ研究会議事務局長。

# 「異性愛者」の違和感

「ギョエテとは俺のことかとゲーテいい」という有名な川柳がある。明治時代の小説家であり、評論家でもある斎藤緑雨の作と伝えられているが、それを裏付ける文献などはなく、緑雨作なのかどうか、実は真偽のほどは分かっていないという。

その作者不詳の名川柳を拝借すれば、私の場合、HIV/エイズの取材をする中で「ヘテロセクシャル（異性愛者）」というカテゴリーを知った時には、「ヘテロとは俺のことか」と釈然としない思いだった。

男が女を好きになり、女が男を好きになる。それは「当然」のことであり、「普通」であり、「みんな」そうなんだという思い込みがあったからだ。他のあり方は異常であり、それなのに自分の方が異常の「異」を含む「異性愛者」だなんて……。

この拒絶の感情をまず自分自身で不当なものであると認め、なおかつその不当さが自らの中に根強く存在し続けている可能性があることを認識しない限り、何かを書いたり、語ったりすることはできない。いまはそんな思いが強い。

「世の中とLGBTをつなぐ、のりしろの役割」という認定NPO法人グッド・エイジング・エールズの松中権代表を日本記者クラブに招いて記者会見をお願いしたのは2年前の4月28日だった。その時の司会を担当し、日本記者クラブの公式サイトの会見報告にも《松中さんは（1）カラダの性　（2）ココロの性（性自認）（3）スキになる性（性的指向）の関係からセクシャリティについて説明した》と次のように書いた。

《LGBは、自らのココロの性（2）とスキになる性（3）の関係（性的指向）》

《Tは、カラダの性（1）とココロの性（2）の関係（性自認）》

《そのほかにも様々な性的指向、性自認の人がいて、セクシャリティはグラデーション（連続的変化）の中でとらえる必要がある》

当事者や研究者の間では、この辺りの説明にも様々な議論があるのかもしれないが、そうしたグラデーションの中に「異性愛者」というカテゴリーもまた位置付けることができる。自己認識の混乱に当惑するギョエテとしては、分かりやすく説明していただいたことに改めて感謝したい。

「アライ」という在り方を教えていただいたのも松中さんだったように思う。英語のally（同盟者、盟友、味方）。社会の中に性的少数者が存在していることに理解を示す人たちといった意味合いだろうか。

報道や出版の分野でも、アライの意識に支えられた仕事は増えている。つい最近も広辞苑の第七版にLGBTが追加され話題になった。残念なことに「多数派とは異なる性的指向をもつ人々」という説明では不十分だという指摘を受け、性自認を含めた解説文が改めて発表された。

辞書にとって正確さは何よりも優先されるべきものだろうから、編纂者にはかなり苦い対応だったのではないかと想像する。

ただし、そのおかげでLGBTが性的指向と性自認の両方を含む概念であることが、より広く理解される機会にもなったのではないか。もちろん誤りを奨励するわけではないが、正誤もまた時の流れのグラデーションの中で変わっていくといった程度の余裕も世の中にはほしい。

昨年の4月にスタートしたこのコラムも何とか今月で1年、続いたことになる。この機会に説明しておくと、タイトルのOne Side / No Sideは、ラグビーの試合終了が「ノーサイド」と呼ばれることから拝借した。敵味方に分かれていた両軍が、終了のホイッスルと同時に闘うことを止め、サイドがなくなる。一つの立場からのワンサイドの見方だけでなく、サイドがなくなってアライになったら物事の見え方もまた変わってくるのではないか。

調子に乗っていると「欺瞞的」などという批判がたちまち飛んできそうだが、自らの内にある偏見や差別を克服する手段としても、ささやかな「アライ」の意識は持っていたい。

LINEでつながる

# Dr.上村茂仁の 性の悩みクリニック

かみむら しげひと
ウィメンズクリニック・かみむら院長（岡山県岡山市）、医学博士

## 連載第24回（最終回）▸▸▸どうして冷え性になるのでしょうか。

**私は現在18歳です、母親もそうなのですが、中学生のころから冷え性で、冬なんかは寒くてたまりません。また、近頃よく足が浮腫（むく）んでいます。**
**どうして冷え性になるのでしょうか。冷え性は、健康にどのような影響があるのでしょうか。**

冷え性になると、次ののような症状が発症しやすくなります。

- のぼせやほてり、手足の痺れや冷感、浮腫
- 不眠、イライラ、疲れやすい、シミや隈
- 月経痛、月経前症候群や不妊症などの婦人科疾患
- 頻尿、便秘や下痢、痔、肩こり、腰痛、頭痛や頭重感、など

20歳代からの40歳代女性の約80％は自分は冷え性だと思っているそうです（2013年マイコール調べ）。

なぜ女性に冷え性は多いのでしょうか。その原因のひとつが筋肉量が女性のほうが男性より少ないからだと言われています。原因のひとつは筋肉ポンプ力の低下です。筋肉には、収縮・弛緩を繰り返すことで手足の血液を心臓に戻すポンプのような働きがあります。この作用が衰えると、血液が心臓に戻りにくくなり、血行が悪くなるため身体の冷えを引き起こします。血行が悪くなると脚の浮腫や肩こりの原因にもなります。また逆に冷房や冬の寒冷などが原因で筋肉の動きが悪くなり、浮腫や肩こりが起こりやすくなります。ダイエットで筋肉量を落とすことも冷えの原因になります。

筋肉ポンプの動きをよくするには日頃から筋肉をしっかり動かして血流の流れをよくすることが大事です。エレベーターやエスカレーターを控えて階段を使うようにする、意識的に手や足の指や足首をいつもと動かしているとか、入浴時や休み時間などにはしっかり自分で筋肉マッサージをすることも有効です。

また身体を暖めることも大切です。冷たい飲み物や生野菜は身体を冷やします。しょうがやニンニク、根菜類などは体を温める食べ物だと言われています。飲み物も暖かいものか常温のものにしましょう。また服装も薄着を辞めてできるだけ三つの首（手首、脚首、首）やお腹を暖めるようにすると、効率よく暖めることができ、冷えが少なくなります。マフラーや膝かけ、手袋、タイツやレッグウォーマーなどを活用してしっかりして暖めて下さい。また独り住まいだとシャワーだけですませがちですが、それが冷えの原因になります。お風呂に入ることは全身の血行がよくなり、体温を上げることにつながります。

冷えに効果的なツボもあります。「太衝（たいしょう）」、親指の爪の脇（人差し指側）から親指の骨に沿ってなぞると指が止まる親指と人差し指の骨が合うところ。「三陰交（さんいんこう）」、内くるぶしのいちばん高いところに小指をおき指幅4本そろえて人差し指があたっているところ、「大椎（だいつい）」、首筋の襟があたる部分で骨が出ている部分のすぐ下、などがそうです。お風呂に入ったときなどに指で押して刺激を与えるのも効果的です。

また今はいろいろなタイプの使い捨てカイロがあります。このカイロを上手に選んでツボを温めると更に効果的です。

体を温める食品の例

| | |
|---|---|
| 野菜類 | ニンジン、カボチャ、玉ネギ、山芋など |
| 肉・魚類 | 鶏肉、羊肉、鮭、鯖、タラ、ふぐなど |
| 調味料・香辛料 | 味噌、ニンニク、コショウ、シナモンなど |
| 豆類など | 小豆、黒豆、納豆など |

体を冷やす食品の例

| | |
|---|---|
| 野菜・果実類 | キュウリ、レタス、トマト、柿、梨、バナナ、メロン、スイカ、パイナップルなど |
| 飲料 | 麦茶、コーヒー、牛乳、豆乳など |
| 調味料など | 酢、植物油など |

[北海道札幌清田高等学校]（下）

# 「当事者性」と「気づき」をキーワードにすすめるLGBTの授業

北海道札幌清田高等学校では、全国に先駆けて、2003年からLGBTを学ぶ授業に取り組んできた。授業は普通科専門コース「グローバルコース」の1年生を対象に、全8時間。どのようなかたちで授業を進めていくのだろうか。今回は、授業の実践内容を紹介する。

## 1時限目は、漫才ネタを教材に

LGBTの授業の単元名は「性と生」。1時限目の授業は「ホモネタ」というタイトルで漫才ネタを取り上げる。

「授業の冒頭で、まずは、なにも言わずにゲイをとりあげたお笑いのコントを生徒たちに視聴させます」。そう語るのは、LGBTの授業に取り組んでいる長沼斎教諭（地理・歴史科、公民科・国際理解担当）。

『かつらをかぶったゲイ』をネタにして、おもしろおかしく演じるコントに、生徒たちから笑いがもれる。そうして視聴が終わったあとに、「なぁ、みんな。寄席で、あるいはイベントでこのコントが披露されたとき、そこにゲイの人がいたとしたら？　あるいは、病気で、たとえば抗がん剤などの副作用で髪が抜けてしまった人がいたら？　そういう人たちがこのコントをみたら、どういう気持ちになるだろう……。と生徒たちに問いかけるのです。そんなふうに、『私たちの中の内なる差別』に気づかせるところから授業をはじめます」(長沼教諭)。

## 「当事者性」の視点をもつ

「性と生」の授業構成は、各単元ごとに問題提起をして、その後、生徒たちは班ごとに分かれてディスカッションを行うかたちですすめられる。たとえば、2時限目のLGBTの授業では、LGBTの定義をおさえた上で、ディスカッションにシフトする。テーマは「同性愛の告白」。

「友人から自分は同性愛者だと告白されたら、あなたはどうしますか？」。という問いには、多くの生徒たちは「同性愛」を告白されたことに驚くが「受け入れる」と答えるそうだ。理由は「大事な友達だから」。一方、「自分が同性愛者だとしたら友人に告白できるか？」という問いには、半分以上の生徒から「受け入れてもらえるかどうか不安。だから、友人には言えない」という答えが返ってくるという。

北海道札幌清田高等学校
校長・岡積義雄
生徒数　950名（グローバルコース120名、普通コース830名）
職員数　71名
（2018年1月31日現在）

長沼斎教諭

3時限目の単元では、同性愛者は左利きの人とほぼ同じ割合で約8％存在することを伝えて、2つの「共通点」と「相違点」を各班ごとに話し合っていく。

「当校は、1クラス40人学級ですから、どのクラスにも3人くらいの割合で、左ききの生徒もLGBTの生徒もいる計算になります。どちらも生まれつきのものだけれど、外から見えないLGBTは、それを知られたら現実の世界では差別されます。当事者の立場に立ったときに『ああ、LGBTのことは怖くて言えないよな』と実感します。そしてマイノリティであるLGBTの立場からものを考えることの大切さに気づくんですね。それが『当事者性』を持つことなので

「性と生」単元案

【単元の目標】

①LGBTやセクシャルマイノリティを取り巻く社会の現状や差別についての知識を得て、セクシャルマイノリティの立場を共感的に理解することができる（知識・理解）。

②互いの感じ方や考え方、意見を尊重し合い、ディスカッションできる（技能・表現）。

③マイノリティの人権に関心を持ち、マイノリティに対する社会の在り方について考え、社会に対し主体的に関わろうとする態度を持つことができる（関心・態度）。

| 単元の展開 | タイトル | 教師の働きかけ | 生徒の活動 | 評価の基準 |
|---|---|---|---|---|
| 動機付け | ホモネタ | お笑いコンビ「アンジャッシュ」のゲイを取り上げたコントを見せ、感想を交流させる。 | 班ごとに話し合い、ゲイを笑いの対象にしていることに気づく。 | 自己の内なる差別に気づく。 |
| 課題の把握 | 同性愛への偏見と差別 | ・「もし友人に同性愛をカミングアウトされたらどうするか」<br>・「自分が同性愛であることを友人にカミングアウトできるか」<br>・NHK「ハートネット」TVのゲイ・レズビアンを視聴させる。 | ➡変わらない、違和感を感じる、避けるなどの意見を交流する。<br>➡社会の偏見や差別に対する不安を認識する。<br>➡同性愛者に対する差別の実体について理解する。 | ・お互いの感じ方考え方を交流しつつ、自分の考えを整理できる。<br>・自らの誤解や偏見を新たな情報を取り入れて、自分の感覚や考え方を修正できる。 |
| 疑問・関心の探求 | 同性愛者と社会 | ・同性愛者と同じ割合で存在する、左利きとの共通点と相違点を考えさせる。<br>・同性愛者が抱えている社会生活での具体的な困難さを提示する。 | ・性は生の問題であり、恋愛・結婚といった人の生き方と深くかかわることに気づく。<br>・社会が多数派を前提としてシステムがつくられていることに気づく。<br>・同性パートナーに対する法的な保障がないことを理解する。 | 同性愛者がマイノリティとしての困難を抱えていることを理解できる。 |
| | 同性婚 | 日本における同性婚（パートナーシップ法）の是非について討論させる。 | 賛成・反対の理由を考え、班やクラスで交流する。 | 同性愛者の人権に対する自分の考えをもつことができる。 |
| | 性の多様性 | セックス、セクシャリティ、ジェンダーの違い。同性愛とトランスジェンダーの違いについて考える。 | 偏見や差別の背景に、無知があることに気づく。 | LGBTについて正しい知識を持つことができる。 |
| | 講演会 | LGBTの方の講演を聞く。 | LGBTの方々と会って、自分の感じ方、考え方を再認識する。 | 当事者の講話に共感的に理解できる。 |
| 認識の深化 | 世界の動向 | 同性婚をはじめLGBTに対する諸外国の対応例をみる。 | 偏見や差別に、宗教的な背景があることに気づく。 | LGBTに対する社会の在り方を展望することでできる。 |
| | マイノリティ | 在日コリアン・障がい者などのマイノリティに対する偏見や差別の例を提示する。 | さまざまなマイノリティに対する問題の本質が、社会のマジョリティ側にあることに気づく。 | 社会的正義に対する自己の在り方を考えることができる。 |

す」と長沼教諭。

「子どもたちに人権やいじめの問題を提起すると、「それはいけないことだ」と、ちゃんと正論を言います。しかし、それが本当に自分のものになっているかどうかは疑わしい。どんなにいいことを言っても、それが実践できていないのはなぜか。それは、当事者性がないからです。だからいじめも差別もなくならないのです」(長沼教諭)。

LGBTは嫌だという生徒ももちろんいる。みんなから「なぜ？」と問われると「なんとなく嫌だ」と。「LGBTの授業を通して、差別や偏見について考えていきますから、頭ではわかっているはずなのです。しかし人間は、正しい理屈に対して、そのまま気持ちが追いつくわけではありません。自分が同性愛者で愛する人ができた、同性と結婚したいと思ったときに、周囲から『おまえは、気持ち悪いんだよ』といわれたときどんな気持ちになるのだろう――そういった質問をもう一度なげかけてみる。そうして、生徒にまた考えてもらうのです」と長沼教諭は言う。

## ゲスト・ティーチャーに当事者を

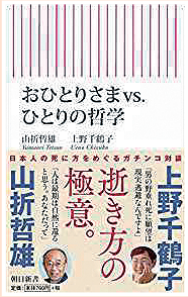
「性と生」の単元では、「当事者性」や「気づき」をキーワードにして授業を実践していく。そして、必ず当事者をゲスト・ティーチャーとして呼ぶのも授業のもうひとつの特徴だ。昨年は、札幌で行われたLGBTのパレードの実行委員長を招いて、子どものころからの人生を語ってもらった。

「その方は大学４年生でしたが、これまでに自殺しようと考えたこともある。文字通り死ぬほど苦しんだ、と。当事者の方は表情や声、身振り、手振りですべてを伝えてくれる。その思いが生徒たちの心にまっすぐ届くのだと思います」(長沼教諭)。

授業の中で、生徒たちはさまざまな視点からLGBTの人が抱える問題に触れていく。絶えず「自分ならどうするか」と自分自身に問いかける。そのことが、当事者性を自覚し、さらに他者理解という、深い学びへとつながっていくのではないだろうか。

（取材・文　中出三重／エム・シー・プレス）

# BOOK GUIDE
## 今月のブックガイド




## おひとりさま vs. ひとりの哲学

山折哲雄・上野千鶴子【著】
朝日新聞出版
定価 760 円＋税

### 「ひとり」の覚悟か美学か妄想か

「おひとりさまの老後」(2007)、「男おひとりさま道」(2009)、「おひとりさまの最期」(2015) の“おひとりさま三部作”で、社会の“ひとりはさみしい、家族に看取られないのは孤独死”という価値観を喝破した上野千鶴子氏と、「ひとり達人のススメ」(2013)、「『ひとり』の哲学』(2016) が男性読者に支持されている（と上野氏が推測する）僧侶で宗教学者の山折哲雄氏による“おひとりさま対談”である。

「正真正銘の独居高齢者」を自認する上野氏は、「妻も子どももいる」という山折氏を「ニセおひとりさま」とあやしみ、冒頭から牽制モード。「おひとりさま」として生きる女性に惜しみないエールを送る一方、漂泊の俳人らに憧れ、「家族はあてにしていない」とのたまい、「最後は野垂れ死にですよ」と自嘲してみせながら、孤高の人を気取る男性（おっさん）に対しては、「絶対に実行しないくせに」と容赦ない。男性が「ひとり」を口にしながら、その実、家族をあてにし、妻に依存し、「ひとり」になるという現実の一切を「思考停止」しているだけではないかと指摘する。女性が「ひとり」で生きていくには、現実的な覚悟が必要。なのに、覚悟がない男性に限って「ひとり」を口にしたがる。そんな「ひとり」願望のおっさんに対し、「自分ひとりの身の廻りの始末さえできないくせに」と言い放ち、「おひとりさま」をめぐるジェンダーの非対称を俎上にのせる。

おっさんの「ひとり」願望は、単なる「現実逃避」「自己美化」であり、「いい気なもんだね」と一刀両断する上野氏に対し、山折氏は「トゲが･･･、そのトゲが･･･（笑）」と、上野氏の“男性への刃”に苦笑い。「ひとり」が「願望的な意図」であることを認めながらも、「危機的な状況でどうにもこうにもならなくなったとき、唯一救ってくれるのは、妄想かもしれないんだよね」と、人の弱さを支える「ひとり」の意味を示そうとする。「二世（あの世）」までもの夫婦のつながりは、たとえ「妄想」であっても、古来からの「人間関係の作法」であり、「ひとり」であろうとする願望を支えるものだという。

当然、こうした妄想は、「誰かと運命共同体になること」を一切望まない上野氏に根こそぎ否定されるわけだが、果たして「ひとり」とはいかなるものかと考えさせられる。夫婦という共同体が、妻の側からみれば「吸収合併」に過ぎず、つねに夫のケアを求められる不平等をはらむ以上、女性の「おひとりさま」宣言は、「脱・共同体」アクションにほかならない。そして、男性の「ひとり」願望が、そうした共同体への依存を前提とする以上、両者の“おひとりさま”論は永遠に交わらない。しかし、上野氏の「おひとりさま」が、女性同士の支え合いに根差したものであるように、ひとりで生きることは、だれかとのつながりや共同体抜きには成り立たない。夫婦関係において、「おひとりさま」として生きることが難しいのは、それが“男女”の関係だからではない。男女が“関係性”を築いていないからである。女性は男（夫）の世話を放棄するために「おひとりさま」を目指し、男性は恭順な女（妻）を妄想して「ひとり」を夢見る。“無関係”という男女の“関係性”が、「おひとりさま」シリーズのヒットを支えているといえるだろう。

文芸論、宗教学、死生観･･･と広がりをみせる対談のなかで、「最後はなんとなく、古狸にまるめこまれたような気もする」という上野氏の不全感で終わる対談の結末はいかに。“まるめこまれた”というより、山折氏の寛容なまなざしに“包まれていた”ようにもみえるが、きっと、そんな「共同体」は望んでいないと言われるだろうなぁ。

（大阪大学大学院准教授　野坂祐子）

研究会、研修会等の情報を下記まで、郵送または、
Fax03-5800-0478でお寄せください。
〒112-0002　文京区小石川2-3-23春日尚学ビル B1
日本性教育協会「JASE ジャーナル」係

**4月 19 日（木）18：30 ～ 21：00**

## SEE（Sexuality Education and Empowerment）性教育アカデミー・2018 春

# トランスジェンダーの歴史

**内　容**

講師：**アーロン・デヴォー** 氏（ヴィクトリア大学教授）

初来日となるトランスジェンダー研究の第一人者で、カナダ・ヴィクトリア大学に附置されているトランスジェンダーに関する貴重資料アーカイブスの総指揮者であるアーロン・H・デヴォー教授（社会学）をお迎えし、「トランスジェンダーの歴史」についてお話いただく。司会・コメンテーターは、土肥いつき氏（セクシュアル・マイノリティ教職員ネットワーク副代表・高校教員）と康純氏（NPO 法人 関西 GIC ネットワーク理事長・精神科医）。

**会　場**　梅田ガクトホール（大阪市北区梅田 2-6-20 パシフィックマークス西梅田 14 階）

**主　催**　SEE（Sexuality Education and Empowerment）
2006 年より、関西性教育研修セミナー運営委員会として、研修の開催・海外スタディーツアー等を企画・実施。
2018 年度より SEE に変更、今後、系統的なアカデミー開講予定。

**参加費・問合せ先等**

**参加費**：一般 2,000 円、学生 500 円（通訳付）、※事前予約者は、軽食付き。
**後援・共催**：日本性教育協会・関西 GIC ネットワーク・大阪府立大学学生センター・大阪府立大学女性学研究センターほか。
**問合せ・申込み先**：①氏名、②所属、③連絡先、④その他（講師への質問等）を記入のうえ
SEE 事務局　kansaishy@gmail.com　にメールで申し込みください。
※情報保障に関する合理的配慮が必要な方は、４月１日までにご連絡を。

# JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

**資料室について**

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約６万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

**資料室利用方法**

【閲　覧】必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っておりません。
【開室日・時間】月～金曜日 10：30 ～ 17：30
【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始　※この他、会議等で臨時に休室することがあります。
【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず１枚 10 円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。
http://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html

**収集文献・資料**

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイアモンド文庫、ほか。
http://www3.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi

最新刊
好評発売中！

## 関西性教育研修セミナー 10 周年記念誌

# 性について、語る、学ぶ、考える

昨今は、性教育・性科学の世界にも新しい風が吹きつつある。性教育をめぐる５W １H（誰が、何を、誰に、いつ、どこで、どのように教えるのか）には、異なる価値観の対立が伴うがゆえに、時として激しいバッシングに見舞われることもある。同時代を生きる古い仲間や新しい仲間とのつながりを大切にしつつ、性教育を次世代につなぐために自分たちにできることとは何かを常に問い続けてゆきたい。

本書は、関西性教育研修セミナーの 10 年間の取り組みをまとめるとともに、セミナー登壇者の何人かにお願いし、現在の性の課題と今後の展望について執筆いただいた。さまざまな現場や経験に基づくバリエーションある報告は、まさに性の幅広い側面を示している。

- 編集／関西性教育研修セミナー実行委員会
- 発行／日本性教育協会
- A4 判・ソフトカバー　128 頁
- 頒価 800 円

### 主な目次

性暴力
教育現場における性暴力被害への支援と課題／野坂祐子
性暴力の「理解」と「治療教育」を求めて／藤岡淳子
規定される性、聞こえない声。／岡田実穂
資料
HIV ／ AIDS
記者から見たエイズ対策／宮田一雄
「ちいさな学校」の経験／ブブ・ド・ラ・マドレーヌ
HIV ／エイズについての医療現場からのメッセージ／白野倫徳
HIV と性の健康／生島　嗣
資料
性の多様性
「語る」社会か「語らなくていい」社会か／土肥いつき
性別違和と子どもたち／康　純
「性」について考えること：西から東、そして北東北へ／宇佐美翔子
「性の多様性」と共生する社会に向けて／東　優子
資料
性教育
30 年の性教育の実践／秋山繁治
知的障がいのある生徒への性の指導と支援／池川典子
LGBT を排除しない性教育のあり方／東　優子
資料
性と社会
社会は性に蓋をかぶせる／池上千寿子
「死にたいと思いつつも、助けてほしい」／渋井哲也
二人の性科学者と Nature vs. Nurture 論争／東　優子
性科学／教育の過去・現在・未来／ミルトン・ダイアモンド
資料

◆本書は JASE ホームページ http://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html からお申し込みいただけます。
または、Email　info_jase@faje.or.jp　　TEL 03-6801-9307　FAX 03-5800-0478 までお申し込みください。